

ありつつも 君をば待たむ

打ち靡なびく わが黒髪に 霜の置くまでに

磐姫皇后(巻二・八七)

「朝妻」(御所市)が出てきます。

葛城氏出身で皇后となり、故郷を離れて難波宮で暮らしながら、仁徳天皇の女性問題に何度も悩まされたイワノヒメ。嫉妬深い、すなわち愛情深い女性だったようです。

白い霜を見かけたら、天皇を一途に思うイワノヒメを思い出してください。

(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

|| 次回は16日

初めてこのコラムを担当いたします。個人的に記念すべき第一回を紹介するのは「万葉集」巻二の冒頭、「磐姫皇后、天皇を思ひて作らず歌四首」の中の一首です。この「天皇」とは第十六代仁徳天皇のことです。巻一冒頭を飾る雄略天皇の祖父にあたり、「万

葉集」で最も古い(時代設定の)歌です。イワノヒメの四首は起承転結の構成になっています。①帰ってこない仁徳天皇を「迎えに行こうか、待たしようか」と迷い、②「恋が苦しくて死んでしまいたい」と続き、③「いつまでも待つ」と決意し、④「私の恋

やまと 万葉がたり

はどのように止むのだろう」と自問して終わります。天皇に向かう思いを最も率直に表すのが三首目、今回掲載の歌です。「霜置く」とは、白くなるという比喩で、白髪になるくらい長い年月でも待つ、という表現です。

残念ながら(?) 整

った短歌四首の連作を実際にイワノヒメが作ったとは考えられず、後の人の創作だと考えられます。巻の最初を伝説的人物の歌で飾っているんですね。

『古事記』『日本書紀』

また『日本書紀』仁徳天皇の歌には、イワノヒメゆかりの地として

【訳】このままずっとあなたを待ちましよう。豊かになびく黒髪が白髪になるまでも。

我妹子に 恋ひすべながら 胸を熱み

朝戸開くれば 見ゆる霧かも

作者未詳(巻12・三〇三四)

んね。

『万葉集』巻12は、主に作者不明の相聞(恋の歌)が収められた巻です。この歌の作者も不明ですが、『万葉集』で唯一「胸を熱み」と表現し、眼前の霧を効果的に詠み込んでいます。情景が思い浮かぶ、すてきな歌だと思えます。

(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

|| 次回は2021年1月20日

「胸熱」という言葉を聞かれたことはありますか? 「胸が熱い」の略語で、若者を中心に近年よく使われています。例えば「鬼滅の刃」最終巻も胸熱だった(感動した)! というように。さて、胸が熱いという表現は、既に『万葉集』にも見られます。我妹子(恋人の女性)

が恋しすぎて、胸が熱い。感動の意味とは少し違います。熱く焦がれる胸の痛みが伝わるかと思えます。 当時は男性が恋人のもとを夜に訪ね、朝に帰るのですが、この歌の男性は何らかの事情で行けなかったようです。逢えない夜を経て朝になり、恋い焦がれながら戸を開けると、

やまと
万葉がたり

見えたのは霧でした。霧には憂鬱・嘆きを表す用法があります。『古事記』に「……頃傾し、汝が泣かさま^く 朝天の霧に立たむぞ……」(うなだれておまえが泣いたら、△朝天の△霧になって立ちこめるだろう)という八千矛神の歌があり、『万葉集』にも「君が行く海辺の宿に霧立

たば吾が立ち嘆く息と あったようです。知りませ」(あなたが旅行く海辺の宿に霧が立ったら、私が嘆く息だと知ってください)を広げると、恋人の女性も同様に嘆いていた例があります。霧は涙の息の水分でできている、という発想が

【訳】あの子が恋しく、どうしようもなく、胸が熱くて、朝戸を開けると見える嘆きの霧だよ。